東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット　主催

オンライン研修「多様性が活きることばの教育」

研修 A　文化間移動する高校生の日本語指導　第3回研修会の報告

テーマ：社会参加のための力を育む日本語指導

研修資料について
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

概要

研修実施日：2024 年 8 月 21 日
参加者：119 名
アンケート回収数：67 件（56.3%）

研修のねらいと目標※

※文部科学省「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）に基づき設定

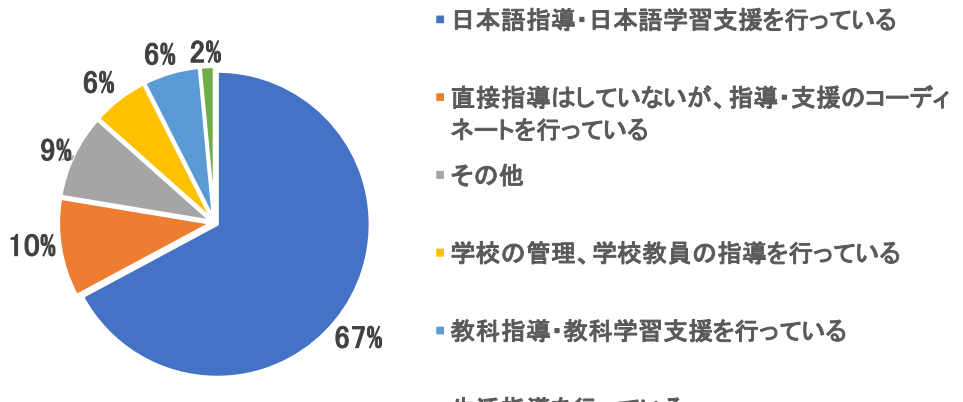
資質・能力	具体的目標
・育む力 （異文化間能力の涵養）	ツ 人権教育、持続可能な開発のための教育、市民性教育等と関連づけて、外国人児童生徒等教育を行うことができる。
・変わる・変える力（多文化共生の実現）	ノ 外国人児童生徒等のマイノリティの立場を理解し、公正性を意識した教育・支援ができる。

プログラム

① 講義「社会参加のためのことばの力を育む
—社会に関わり続け、問題を解決するために」
東京学芸大学　齋藤ひろみ
事例紹介・話し合い
「荒井学園高岡向陵高等学校 2023 キャリアアップ・日本語の取り組みについて」
荒井学園高岡向陵高等学校　非常勤講師　青木由香
② 報告「高等学校における帰国・外国人生徒への支援体制について」
北海道函館工業高等学校　定時制 教頭　鈴木悟・教諭　前野哲也
③交流

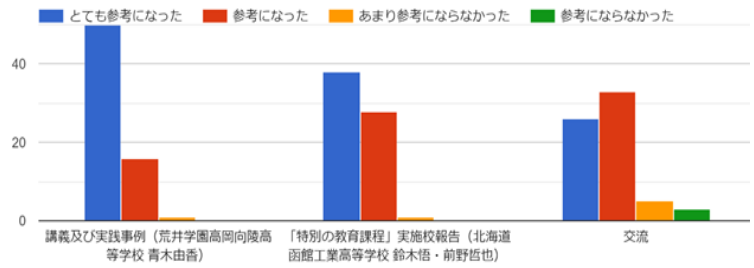
アンケートより

＜参加者の子どもの日本語教育への関わり＞



2校の実践報告は具体的にどんな活動をしたか、分かりやすく、参考にできる内容でした。また、交流では各学校の取り組みの話を聞けて良かったです。

＜参考になったか（満足度）＞



支援者としてはどうしても日本語力を伸ばすことに力を注力してしまいがちですが、言葉を使って社会参加、自治（学校など）に関わる経験こそが生きた学びとなる。

冒頭の講義と２校の実践報告が具体的な形で結びつき、とても実感としてわかりやすかった。

生徒が苦労しながらも、日本人も含めた仲間と助け合いながら、自身の力を成長させていく。この形・姿を今後の支援活動に繋げていきたい。

参加者の声

現場での取り組みや課題、苦悩、乗り越え方など、詳しくお聞き出来たこと。やはり現場で頑張っている方の声が一番参考になりますし、自分の実践の方向にも非常に役立ちます。

様々な事情から日本の高校に在籍することになった外国籍の生徒たちが実際に何を感じているのか、学校生活においてどんな問題があるのかを聞かせていただくことができました。またその問題や課題にどう対応するのかについても、両校の先生方の実践から学ぶことがありました。

研修企画者より

令和６年度は、高等学校の日本語指導に関する研修「文化間移動する高校生の日本語指導」（研修Ａ）は、参加者の利便性を優先し、全てオンラインで実施しました。「文化間移動」という視点と「社会参画」という二つの視点から、３つのテーマ「進路選択で重視される日本語の力」「キャリア開拓のための日本語指導」「社会参加のための力を育む日本語指導」を設定し、構成しました。講義や事例の紹介、そして交流を通して、日本語を学ぶ高校生を、学齢期来日という経験を有し、日本社会の一員としてその一歩を踏み出すステージにある若者として捉え、持てる力を発揮しつつ、明日の自分を形成する力の教育として、日本語指導を検討してきました。

第3回研修では、多様化・複雑化する現代の日本において、社会参加をする上で直面するであろう問題・課題を解決するための力を育む教育活動として、日本語指導について検討しました。ポイントは「社会を批判的に読み解き、社会に働きかけ変える」ような社会的実践としてのことばの学習です。事例として、富山の私立高等学校で実施された、外国人生徒らが学校長に自分たちの意見を伝える活動の紹介がありました。この実践を参考に、グループでの話し合いをしました。トピックは、「外国人生徒がバイトの面接申し込みをしようとしたら「外国人お断り」と電話で断られた（排除された）」という出来事の後、皆さんなら教育的対応・日本語指導として何をするかです。同級生に同様の経験がないか調べる、差別の問題について学ぶなど、多様なアイディアが出されました。

さらに、「特別の教育課程」の実施事例として、１人の外国人生徒を対象に「特別の教育課程」による日本語指導を実施している函館工業高等学校より、制度導入の経緯や校内の組織的体制づくり、そして、地域の支援団体や大学との連携による環境づくりの報告がありました。

会場からは、参加者の「声」でもご紹介したように、高等学校現場の体制の組織化、教育・指導の内容と方法、そして、生徒が社会参加をしようとしたときに向き合う問題とその解決方法などを、実感をもって具体的に学べたことについて多くの感想をいただきました。取り組みの当事者から直接聞き、生徒さんの作文や実際の声からその姿を具体的に描けることが、共感や説得性を生むようです。２校の取り組み事例から、高等学校で学んでいる間に、ことばを介して能動的に社会と関わり、働きかけることと、その過程でことばの力を高めることが社会参加のためのことばの力を育む上では非常に重要だと感じます。各校が取り組んでいる「多文化共生教育」「キャリア教育」「人権教育」等、社会との関わりを重視して実施される他の教育領域の活動と、日本語指導を関連付け、横断的に実施していくことで、そうした機会と場を広げ、豊かにできるのではないかと、期待します。